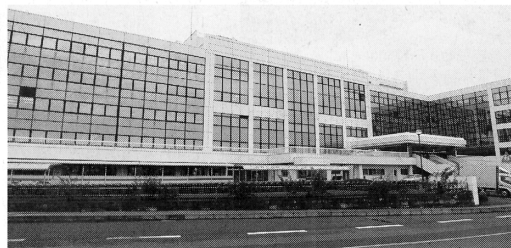


広島生まれ育ち、昨まで広島大学大学院歯学保健学研究院教授として活躍していた赤川正氏が、4月から奥羽本学長に就任した。東日本大震災の影響による入学者数の減少など餘りの見える同念を立直すべく、関係者一丸となって教育改革に着手している。学長就任に当たった際の意気込みや、今後の展望などを聞いた。

interview

赤川安正 奥羽大学学長

# 大学再生目指し 教育改革に着手



参加型臨床実習なども行う大学附属病院棟



広島県呉市に、歯科医師の長男として生まれる。中学、高校、大学大学院と広島市内で育ち、広島大学で助手、講師、教授として活動。インプラントを学ぶために留学したスウェーデンのイェテボリ大学の1年2カ月、客員教授を務めたアメリカのハーバード大学での4カ月を除いては、広島赤川氏は奥羽大学への着任に

——東日本大震災の影響など厳しい環境に置かれている中、奥羽大学の現状をどのように捉えていますか。  
赤川 原発のある地域と離れていくにもかかわらず、郡山市を敬遠する雰囲気は確かに見られます。しかし、在学生、保護者の震災

島の地で過してきた。「広島で生まれ育ったのが一番の強みであり、これが一方でほか、広島と異なっていて新鮮で、今まではなかったところを知らない」というコンプレックスでもありました。これまでインプラントと高齢

## 横顔紹介

「気候、風土、物の考え方、人の立ち居振る舞いなど全てが、月にはアメリカ補綴学会から「ゴールドメダル」を、3月には「AID R」から「歯科補綴学・インプラント研究部門」最優秀科学者賞を受賞。現在もインプラントの新素材の開発、またヘルソハイマー病と咬合の関係について研究を進めている。

直後に見られた不安は確実に薄らいでいます。

問題として、歯科本学、歯学部が29校ある中で、「絶対に行きたい」と選ばれたための魅力が十分でないことだと感じています。

——以前勤めていた広島大学と比べて何か違いを感じますか。  
赤川 国立大学には歯学の研究や先進的な臨床を行うリーダーを育成する使命があり、母校の広島大学もバイオデンティストリーの概念を持って教育に当たっています。

一方私立大学は、創設者の建学の精神を明確に具現化し、地域に人材を輩出する責務があります。本学は「高度な専門知識と技術を備えた人間性豊かな人材を育成する」という明確な建学の精神があり、ほとんどの学生は「良い歯科医になりたい」と入学してきます。それゆえ、建学の精神を生かしたきめの細かい教育をいかに実現できる

か？  
赤川 着任してからは、学生、全研修医、教員からのヒアリングを始め、学生による浸透評価の全てに目を通すなど、現状把握に努めています。

また、実際に授業を聴講し、分かりにくい説明やスライドに対しては工夫してもらうなど、できることから改善しています。新しい教育技法や学生ごとの達成度を確認できる評価なども取り入れたと考えていますが、まずは6年生の教育の改善を優先させています。

幸いにも、教職員は私の考えによく耳を傾けてくれ、全員一丸となって目標に向かふ姿勢が徐々に鮮明となってきています。私もリーダーシップを発揮しながら本学を大きく変えたい、また本学が愛する大学となる素地は十分に備えていると信じています。

——対外的なアピールについて何かビジョンはありますか。  
赤川 社会に対しては、このような教育をしてこのまんな人材を育てているので、ぜひ来てほしいと感じています。本学がいつかけるのが王道だと思ひますが、早急に取り組みたいと思っています。また、対外的に示す教育指標は、国家試験の合格率ですが、この合格率を上げることは最大の目標です。出題基準も委員長として変えてきましたので、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。

民に与える役割を担い、それを全うするには診療室完結型の歯科医療だけでは不十分で、求められている場所に向いていくことが必要となり、そのような歯科医師を育てていかなければなりません。インプラントはもちろん、トータル時のレスキューをもできる人材、摂食嚥下障害の診断と治療がきちんとできる人材の養成は、奥羽大学、歯学部29校ともまだまだ十分とは言えないと感じています。本学がいつか早くこれらに取り組み「ぜひ行きたい」という魅力ある学校にしたいと考えています。

「学生に選ばれる学校に」